



家庭訪問の教師に宿題のプリントを見せる代替校/ALSの学生。学校が遠くて学業を中断、母親となりましたが、ALSで学ぶ機会を得ました。



2021年4月25日発行

NPO法人ビラーンの医療と自立を支える会

(英文名略称・HANDS)

本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町516-11

TEL & FAX: 045-500-9151

E-mail: hands-mindanao@nifty.com

<http://hands-mindanao.a.la9.jp/>

郵便振替口座 00210-5-72693

加入者名：ビラーンの医療と自立を支える会



## SDGs4「質の高い教育をみんなに」 — 山岳部先住民族の子どもの場合 —

### SDGs4の「教育支援」は今年度も活動の中心に

「教育 71%、医療 21%、環境保全・農村開発他 8%」  
コロナ禍は続きますが、上記の予算配分のもと、今年度もカレッジ奨学金送金等から支援事業を開始しました。

発足時の緊急かつ最大のニーズが医療であったため、「医療を支える」から始めた活動に教育支援を加えたのは、現地協力組織CMIPから届いた「貧困以外に早婚の風習もあり、4年で中退が多い。5,6年生用奨学金支援を」の要請です。その後、英語やフィリピン語の教科書をビラーン語で教える教師が必要ということで、民族の専門職育成のニーズが強まり、カレッジ奨学金や学生寮建設を加える中で、教育支援は予算面で最大の事業となりました。

「質の高い教育をみんなに」の実現には時間が必要ですが、必ずや医療を含む社会的経済的状況の改善につながります。

以下、長期にわたる教育支援の成果やニーズの変化、また、山岳部先住民族ゆえの課題に触れたいと思います。

### 山岳部にも増えた公立校・変わる私学支援

長期にわたりチボリやマノボ等の先住民族教育を支えてきた「少数民族里親の会/FOT」と「チボリ国際里親の会/JOFPA」の活動を、2002年と2013年にそれぞれ引き継いだ当団体にとって、教育支援の比重がさらに増すとともに、先住民族の私学を取り巻く状況の変化にも対応することになりました。

上記JOFPAが支えてきたチボリの伝統継承を建学理念とするレイクセブ町のSCMSI校では、通学の便や選択するコースの関係で公立校への転出が増えました。

さらに、フィリピンの教育政策の進展により私学であるSCMSI校への政府補助金や在学学生支援奨学金拡充で、40

年にわたりSCMSI校運営を支えてきた私たち日本の市民への支援のニーズも減りました。元FOTが支えてきた住民組合運営のブラクール校は、子どもたちは近隣の公立校に移り、チボリおよびマノボ民族のための私学支援を終えました。

### 山の子どもたちのハンディ「遠い・危険」

一方、辺境にあるビラーンの子どもたちの小学校4校（約500名、CMIP運営）の給食支援のニーズは続いています。満足な朝食なしで遠路山道を登校する児童に「学校に行けばご飯がある」は就学継続の重要な動機付けとなっています。

このCMIPと協働の教育支援で印象に残るのはキアミ村のつり橋建設です。濁流渦巻く雨季にも橋一本あれば、対岸にある公立小中校や役場に徒歩30分で繋がります。票にならない辺境の課題に行政が動かない中、多額の寄付をいただく機会に恵まれて、2012年につり橋を支援しました。

教育普及を阻む山岳部の「遠い・危険」のハンディは、基礎教育年限を幼稚園からハイスクール12年までと延長したKto12と呼ばれる教育改革で一層顕著になりました。教育のページで触れる幼稚園児の「先住民族学校」や年限延長で増えたハイスクール中退青年対象の「代替校」は、厳しい山の通学環境の中で拡大したニーズへの対応です。

世界に目を向けると、今も多くの子どもたちが戦火により教育の機会を奪われています。私たちの支援先アトゥモロックでも、近くの山に潜む反政府ゲリラと政府軍の遭遇を恐れて、短期間休校になったことがありました。

SDGs「質の高い教育をみんなに」を阻む要因は様々です。その一つひとつに対応する息の長い活動へのより多くの市民、特に若い世代のご参加を期待しています。（山崎）